



## その16

# 百済王 敬福

—くだらのこにきしきょうふく—

(平成27年5月1日号—第296号)



桜の名所としても知られる百済寺跡[くだらでらあと] (中宮西之町) は、百済王[くだらのこにきし]氏の氏寺として建立された寺院の跡で、府内に2カ所しかない特別史跡に指定されています。

百済王氏とは、百済[くだら]の王族の末裔[まつえい]で、奈良時代から平安時代にかけて活躍した貴族です。

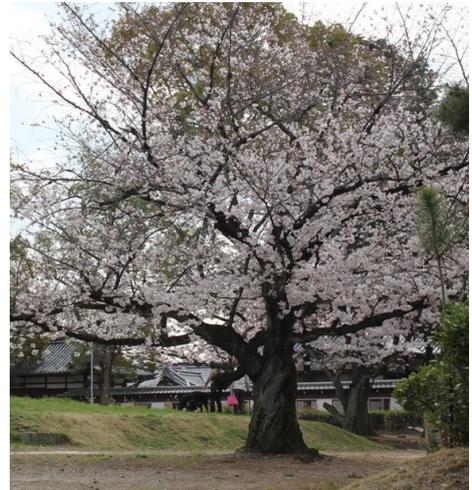
そもそも、古代の朝鮮半島では高句麗[こうくり]、百済、新羅[しらぎ]の三国が覇権を争っていましたが、新羅と唐の連合軍によって百済が滅ぼされたとき、倭国(日本)に王子の豊璋[ほうしょう]・禅広[ぜんこう] (善光)の二人が滞在していました。倭国は、兄の豊璋を国王に擁立して再起を図る百済の遺臣とともに挙兵するものの、大敗しました。いわゆる白村江[はくすきのえ]の戦いです。

このとき、倭国にとどまった弟の禅広は朝廷に重んじられ、持統天皇のときに、百済王という氏姓を賜り、一族は一流貴族としての待遇を受けたとされます。

また、百済寺跡の北方に広がる禁野本町遺跡では、百済寺跡の中心軸に一致する南北道路とそれに交差する東西道路が検出されるなど、百済王氏が計画的にまちづくりを行ったと考えられます。

天平21年(749)、禅広のひ孫にあたる百済王敬福[くだらのこにきしきょうふく]は、陸奥守[むつのかみ]のとき、東大寺の大仏造立に際し、陸奥国小田郡(現在の宮城県遠田郡涌谷町)で産出した黄金を聖武天皇に献上しました。この功績によって敬福は7階級特進、従三位[じゅさんみ]にまで位階を進め、宮内卿[くないきょう]に任ぜられました。さらに、河内守[かわちのかみ]を兼務することとなり、百済王氏一族はこの機に交野郡(現在の枚方市、交野市の一部)に移住したといわれています。

『続日本紀[しょくにほんぎ]』の記載によれば、敬福は豪放で酒を好み、聖武天皇の寵遇を受けたとされ、常陸守[ひたちのかみ]や讃岐守[さぬきのかみ]や刑部卿[ぎょうぶきょう]などを歴任し、天平神護2年(766)に、69歳で没しています。



桜が満開の百済寺跡

(写真奥は百済王神社)